

体育祭及びダンス授業の実施状況に関する報告 ～地方のダンス教育の実態に着目して～

高田康史（広島文化学園大学） 近江 望（吉備国際大学）

生関 文翔（安田女子短期大学） 中尾 道子（環太平洋大学） 湯浅 理枝（広島文化学園大学）

1. はじめに

これまでに、我が国の公教育における保健体育科においてダンス授業がどのように展開されているかに関する実態調査は、高橋(2019)、中村(2018)、山崎(2013)、鍋山(2009)、木山(2005)など数多くの調査がなされてきている。

しかしながら、学校現場におけるダンス教育である体育祭ダンスに関して以下のような指摘がなされてきている。高橋(2016)は「運動会や体育祭で踊ったことでダンスをおしまいにする学校がある」、茅野(2017)は「学校教育でのダンス経験は『授業』ではなく『体育祭』が多い」と述べられており、体育の単元を行わず体育祭のみでダンス教育を終えている現場の実態が危惧されている。そもそも、体育祭は特別活動の体育的行事であり、学習指導要領においても、「体育科内容の関連と時間の配当に留意すること」との文言があるため、体育祭でのダンス＝ダンス授業（ダンス単元）とすることには問題があるとも考えられる。高田(2017)は、「”体育祭問題”が解決しなければより豊かなダンス授業の発展はない」と述べており体育祭ダンスの実態や、ダンス授業と体育祭の関係性を調査することがダンス授業のより豊かな発展につながると考えられる。上記に示したダンス授業の実態調査に関する研究ではこの部分に着手したものは管見の限りない。

そこで本研究では、地方の教育における体育祭とダンス授業の関係を中心にダンス教育に関する質問紙調査を行い、ダンス教育のための基礎資料を得ることを目的とする。

2. 研究方法

(1) 調査方法

質問紙調査法にて調査を行った。

(2) 質問紙の内容

質問紙の内容については以下の通りである。

「教職歴」「性別」「クラスサイズ（学年規模）」
「ダンス授業に関する意識調査」「ダンス授業の実施実態について（内容・時数）」「体育祭でのダンス（表現）の実態調査（内容）」

(3) 質問紙の配布対象と属性について

本研究では、地域や教員の資質に応じたデータを採集しその違いを検討するため、以下の4群を対象に質問紙を回収した。

1) A群の配布方法及び対象について

小規模校（クラス人数10人未満など）が比較的多い過疎地域の体育部会にて質問紙を配布し回収している。対象地域の教員への聞き取りから、地区でダンス研修等は基本的に開催されていない実態がある。この群を本研究では過疎群と定義した。

2) B群の配布方法及び対象について

地区体育部会にて質問紙を配布し回収している。この地域では、年1回ダンス授業作品の発表会を伝統的に実施している。そのため、仮説として、地区発表会と言うゴールがあるため、校内でダンス授業を行う必然性が比較的高いと想定される。この群を本研究では発表会群と定義した。

3) C群の配布方法及び対象について

教員の自主研修にて質問紙を配布し回収している。この研修会は、県内全域から教員が自由参加で集まる会(50名規模)であり、例年、ダンス授業での単元の指導方法などを中心に外部講師を招聘して研修を行なっている。そのため、仮説として授業研究やダンス授業に対して、熱心に取り組む教員が比較的多い群であると考えられる。この群を本研究では自由研修群と定義した。

4) D群の配布方法及び対象について

県教育委員会主催の研修にて質問紙を配布し回収している。この研修会は、毎年行われる教育委員会主催の研修会であり、各校から1名以上の参加を必須としている会である。仮説として、自身は、ダンス授業や単元のあり方についての探究心

や関心がなくとも参加している教員が一定数存在する可能性がある。この群を本研究では必須研修群と定義した。

3. 結果及び考察

(1) クラスサイズについて

各群の学年のクラスサイズは以下の通りであった。A群(過疎群)平均1.3クラス。B群(発表会群)平均5.0クラス。C群(自由研修群)平均4.23クラス。D群(必須研修群)平均5.0クラス。

(2) ダンス授業及び体育祭ダンスの実施状況(全体)

ダンス単元及び、体育祭を両方実施しているのは51.85%、ダンス単元のみの実施は9.26%、体育祭のみの実施は30.25%、どちらも実施していないのは8.64%であった。上記より、単元としてダンス授業を実施していない教員は38.89%存在していることが明らかとなった。高橋(2016)茅野(2017)で言及された体育祭のみでダンスを終わらせる学校が多く存在するという指摘を支持する結果となった。

(3) ダンス授業及び体育祭ダンスの実施状況(群別)

ダンス単元未実施率を群ごとに比較すると、A群(過疎群)72.22%、B群(発表会群)45.29%、C群(自由研修群)21.28%、必須研修群36.37%となった。

このことより、ダンス授業に対して比較的意識が高いと考えられる自由研修群においても、2割程度は単元での体育授業未実施であるといえる。また、過疎群に関しては、地域性に加えて、地区でのダンス研修会が定期的に行われていないことがこの数値に影響している可能性がある。一方、発表会群は、過疎群に比べて実施率が高いことより、地区発表会という“場”の提供が授業実施率を引き上げている可能性もある。しかしながら、悉皆研修を行なっている必須研修群の方が発表会群よりも実施率が高くなっていることから、中村(2018)で言及された「悉皆研修」の重要性が支持されたといえる。

(4) 教員研修受講経験の有無と授業の実施について

各群における、教員研修の受講経験の有無及び

授業の実施について以下に示す。

各群で教員研修の受講経験がある教員を全数とした場合、A群(過疎群)では、「研修あり授業実施」50.00%、「研修あり授業未実施」が50.00%。B群(発表会群)では、「研修あり授業実施」56.10%、「研修あり授業未実施」が43.90%。C群では、(自由研修群)「研修あり授業実施」84.21%、「研修あり授業未実施」が15.79%。D群(必須研修群)では、「研修あり授業実施」71.43%、「研修あり授業未実施」が28.53%であった。

このことより、教員研修を受けた教員が一様に授業を実施しているとはいえない。15%～50%の教員が授業を実施しないことより、授業実施の有無には、教員研修の受講経験以外のファクターが関わっていると考えられる。仮説として、地域性、学校の伝統やカリキュラム、教員の資質などの要因が絡んでいると推定されるがこの部分は今後の研究課題といえる。

(5) ダンス授業の実施内容(全体)

本調査において表現系ダンスの単元を実施している割合は25.71%、リズム系ダンスを実施している割合は58.71%、フォークダンスは16.08%であった。中村(2018)の先行研究では大阪の全クラス、千葉男子クラス、などが同様の結果であったため、実施割合については地方によって傾向が異なるといえる。

また、単元の内容を精査した際、単元内で作品作りのみを実施している状態、つまり、学習者に活動を丸投げしていると考えられる授業展開の割合は、表現系ダンス単元で5.56%、リズム系ダンスで21.43%みられた。このことより、リズム系の方が、単元指導の方法が周知されていないと考えられる。学校現場において、研修・指導資料・指導要領の解説その他、指導のための環境が整っていないのではないかと考えられる。

(6) 体育祭ダンスの実施内容

本研究において、体育祭ダンスではリズム系48.48%、フォークダンス31.82%、複合作品19.97%であった。また、体育祭ダンスの72.73%が教師or一部の生徒による一斉指導であった。「主体的・対話的で深い学び」を鑑みても体育祭活動において、「協働して学習」「対話的に学ぶ」必要性があるのではないかと考えられる。